

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営(2)

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 白川部 達夫  |
| 雑誌名 | 東洋大学文学部紀要. 史学科篇 = Bulletin of Toyo University, Department of History, the Faculty of Literature |
| 号   | 40  |
| ページ | 111-129   |
| 発行年 | 2014  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00006997/">http://id.nii.ac.jp/1060/00006997/</a>             |



## 大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営（二）

白川部 達 夫

### はじめに

近江屋市兵衛家は、文政末年から天保初年に本家近江屋長兵衛家から分家して、干鰯屋仲間の古組（問屋組）に属した干鰯屋であった。同家の文政・天保期の経営については前稿で検討した。<sup>①</sup>ここでは続いて、安政・文久期の経営について分析する。<sup>②</sup>

近江屋市兵衛家は、天保末年に当主の死去で、残された幼少の姉弟は本家に引き取られて養育されることになり、商売は断絶した。市兵衛家が再興されるのは安政二年（一八五五）のことであった。以下、再興の事情から検討を始めることとする。

# 一 近江屋市兵衛家の再興

近江屋市兵衛家の再興にあたって、本家と取り交わされた証文をまず検討しよう。<sup>③</sup>

①

証

一、分家市兵衛死跡遺書之廉ヲ以、文并市藏幼少ニ付、本家引取養育、既ニ昨年元服為致候ニ付、改分家為致度処、近來改革訳柄在之、旁々相送り候、此度何呉と市藏事先代市兵衛家名相続ニ付、当月廿五日幸ひ宜敷日柄表札懸、本人自宅為引取可申候、尤元手銀之義一同ニ取揃遣シ可申処、前書之通即齊難差遣義、先方ニも承知候へは、兼て頼入候廉も在之故、銀子調達出来候ハ、其内ヲ以當時銀五貫目差遣シ、余ハ本分之間柄ニ付、敢捨置候訳柄無之、前書之通、其元殿取扱約定致候事、異変無之候、仍て如件、

安政貳卯歳

正月廿二日

名 名

太右衛門殿

②

近江屋市兵衛二子一件為取替之写

証

一、文・市藏死跡後、姉弟共本家之御養育預り成長致、既ニ市藏事昨年元服、此度速ニ分家被成下候段、御取扱被下、

尚文事縁談ニ付於本家不一形成御世話被下、文事何れへ縁談相極り候共、私方ハ本家へ人別寺送り等差送り候間、御趣意御取計被下度、同人事ニ付彼是等一切申間敷候、尤同町同寺候故、今日ニても寺送り人別等御勝手御引取被成、此度其元取扱ヲ以前書之。通約定致置、異変無之為後日仍て如件

安政貳卯

正月

太右衛門殿

伊太郎 印

まつ

①は近江屋市兵衛家の再興についての一札である。本家に養育されていた市蔵が前年元服して市兵衛家を継ぐこと、正月二五日が日柄がよいので表札を出して、自宅へ移ったことが確認された。また元手銀が渡される筈であったが、本家が不振のため、まず銀五貫目を渡し、残りは本分の間柄なので、必ず渡すと約束されている。別の下書きによると差し出し者は「長」「栄」とある。<sup>④</sup>近江屋長兵衛と稲葉屋栄蔵のことであろう。稲葉屋栄蔵は、近江屋で干鰯屋に進出した長兵衛（道順）の子供で、干鰯屋であった稲葉屋の株を買って名跡を継承していた。初代市兵衛（宗順）の兄弟にあり、安政五年（一八五八）に死去したとされる。<sup>⑤</sup>

②は市蔵の姉文の縁談を本家が世話して進めることについて、母まつが異論のない旨出した一札である。

母まつは、嘉永四年（一八五二）に子供二人のことで、「自分勝手申募り、長々御心配相掛ケ」たとして、近江屋長兵衛と稲葉屋栄蔵に詫び、「御親類中御取極儀御座候ハ、」子供兩人のことを万事頼むと一札を出している。<sup>⑥</sup>市兵衛家の再興をめぐり、この頃から、生母と本家の間に行き違いがあったのであろう。母まつにとっては、待望の市兵衛家の

再興であつたわけである。

ところで近江屋長兵衛家の記録によれば、干鰯屋を開業した長兵衛（道順）の子供であつた初代市兵衛（宗順）は天保九年（一八三八）に亡くなつてゐる。<sup>⑦</sup>その後、二代市兵衛が継いだが、天保一三年頃に亡くなり、近江屋市兵衛家は中絶を余儀なくされたと考えられる。

天保一三年頃というのは、市兵衛が「御二家」へ宛てた「預り物」の一札に、「壬寅四月」という干支があることから推定したものである。<sup>⑧</sup>一札には「病中」の文言や「妻お松分預り」銀の項目があるので、市兵衛は自分の死後の処理のために、この一札を作成したことがわかる。現存する近江屋市兵衛家文書も天保一四年（一八四三）を最後に安政二年（一八五五）まで断絶が見られるので、二代目市兵衛の死は、天保一三年（壬寅）ないし天保一四年（一八四三）と見るのが妥当であろう。

安政二年（一八五五）に市兵衛家を再興した市蔵は、その前年に元服したとある。明治時代になつて大阪商工会議所会頭になる近江屋・田中市兵衛は天保九年（一八三八）生まれとされるので、年頃からいって、この市蔵が後の市兵衛であつたと見られる。<sup>⑨</sup>市蔵が天保九年（一八三八）に二代目市兵衛とまつとの間に生まれたとすれば、天保一三年（一八四二）には四歳であり、安政二年（一八五五）には一八歳となる。少し遅めの元服は、本家に預けられていたことと、元服させれば分家再興の必要があり、商売の訓練の進み具合、当時本家長兵衛家が不振で再興資金の調達が困難だったことなどの障害があつたためであらう。母まつと本家長兵衛との行き違いも、この辺の事情であつたと考えられる。二代目市兵衛はまつに自分の死後、本家に幼少の子供二人を預け、実家に帰るように遺言していた。また市兵衛家の再興のために、資金となるもの五一品をまつの実家錫屋へ預かることを命じていた。このことは後日、本家との間で問題になり、まつの品を本家へ引き渡している。<sup>⑩</sup>こうした事実もあつて、まつは市兵衛家の再興を本家に要請していたも

のと思われる。

以上、市兵衛家再興のいきさつについて、やや詳しく説明した。明治になって大阪経済界のリーダーとして活躍した近江屋・田中市兵衛が天保九年生まれで、明治元年（一八六八）に家業を継いだという所伝もあるが、安政二年（一八五五）に同家を再興した市蔵が、後の田中市兵衛であり、したがって明治元年（一八六八）に家業を継いだとするのは誤伝であったことがわかる。なお市蔵は、文久元年（一八六一）の干鰯屋仲間書き上げには、近江屋市兵衛と名乗っている<sup>(12)</sup>ので、この頃には襲名したようである。

## 二 安政・文久期の干鰯買付

近江屋市兵衛店は、安政二年（一八五五）に家業を再開した。安政二年の文書も若干残されているが、まだ整ったものではなく、分析がむずかしい面がある。ことに買付状況を示すものは少なく、安政・文久期では、文久二年（一八六二）の「干鰯買日記」と安政六年（一八五九）「買付帳」<sup>(13)</sup>だけである。そこでここでは両者を分析して、再興期の市兵衛家の動向を検討する。

文久二年（一八六二）の「干鰯買日記」を分析したものを表1に示した。この買日記は、大坂とその周辺での買い付けを記録したものであり、江戸との取引は買付帳に記録された。したがって当該年の買い付けの全体を示すものではないが、後で分析する買付帳もあるので、大体の様子は把握できる。

まず総額は、銀七一四貫匁余の買付額となっている。天保元年（一八三〇）の買付額は銀七五一貫匁余、天保二年

表1 文久2年の仕入れ状況

| 場所                 | 仲間  | 品目     | 俵       | 重量 (貫)  | 代銀(匁)   | %    |     |
|--------------------|-----|--------|---------|---------|---------|------|-----|
| 大坂                 | 干鰯屋 | 干鰯     | 289     |         | 7,373   | 31.3 |     |
|                    |     | メ粕     | 257     | 15,213  | 104,759 |      |     |
|                    |     | 鯡粕     |         | 5,804   | 34,421  |      |     |
|                    |     | 羽鯡     |         | 1,298   | 6,152   |      |     |
|                    |     | 鱒粕     |         |         |         |      |     |
|                    |     | 数子     |         |         |         |      |     |
|                    |     | その他    | 68      | 12,753  | 70,532  |      |     |
|                    | 小計  |        |         | 223,237 |         |      |     |
|                    | 松前組 | メ粕     |         | 11,060  | 53,492  | 55   |     |
|                    |     | 鯡粕     |         | 33,484  | 164,942 |      |     |
|                    |     | 羽鯡     |         | 898     | 4,040   |      |     |
|                    |     | 鱒粕     |         |         |         |      |     |
| 数子                 |     |        | 812     | 4,669   |         |      |     |
| 玉粕                 |     |        |         |         |         |      |     |
| その他                |     | 31,901 | 165,182 |         |         |      |     |
| 小計                 |     |        | 392,324 |         |         |      |     |
| 大坂周辺<br>(兵庫・泉州・紀州) |     | 干鰯     |         |         |         | 4.6  |     |
|                    |     | メ粕     |         | 6,222   | 33,164  |      |     |
|                    |     | 鯡粕     |         |         |         |      |     |
| 不明                 |     | 羽鯡     |         |         |         | 9.1  |     |
|                    |     | 鱒粕     |         |         |         |      |     |
|                    |     | 玉粕     |         |         |         |      |     |
|                    |     | その他    |         |         |         |      |     |
|                    |     | 小計     |         |         | 33,164  |      |     |
|                    |     | 干鰯     |         |         |         |      | 9.1 |
|                    |     | メ粕     |         |         |         |      |     |
|                    |     | 鯡粕     |         | 2,157   | 10,302  |      |     |
| 羽鯡                 |     | 991    | 5,470   |         |         |      |     |
| 鱒粕                 |     | 707    | 4,598   |         |         |      |     |
| 白子                 | 13  |        | 1,080   |         |         |      |     |
| 数子                 |     | 307    | 1,798   |         |         |      |     |
| その他                |     | 9,912  | 42,082  |         |         |      |     |
| 小計                 |     |        | 65,331  |         |         |      |     |
| 小計                 |     | 干鰯     | 289     |         | 7,373   | 1    |     |
|                    |     | メ粕     | 256     | 32,495  | 191,415 | 26.8 |     |
|                    |     | 鯡粕     |         | 41,444  | 209,666 | 29.4 |     |
|                    |     | 羽鯡     |         | 3,187   | 15,663  | 2.2  |     |
|                    |     | 鱒粕     |         | 707     | 4,598   | 0.6  |     |
|                    |     | 白子     | 13      |         | 1,080   | 0.2  |     |
|                    |     | 数子     |         | 1,119   | 6,467   | 0.9  |     |
|                    |     | 玉粕     |         |         |         |      |     |
|                    |     | その他    | 68      | 54,566  | 277,796 | 38.9 |     |
| 合計                 |     |        |         |         | 714,056 | 100  |     |

出典：東洋大学井上門了記念博物館所管：近江屋市兵衛家文書、41番。

注：干鰯屋・その他の目刺68束、不明の白子は13丸の単位である。

(一八三二)は銀八二五貫匁余であるので、名目上は一定の回復を示したといえる。ただこの間の魚肥価格の上昇があるので一概にはいえない。鯧粕について見ると、文久二年(一八六二)には銀二〇九貫匁余で買付重量は四万一千四四貫目であるが、天保二年には銀一四九貫匁で重量七万一千五七二貫目となっている。文久二年(一八六二)には鯧粕一〇貫目が平均銀五〇・六匁の価格になっているが、天保二年(一八三二)では銀二〇・九匁であったので、この間に価格が二・四倍も上昇しているのである。したがって銀額では名目上回復を示したものの、魚肥の価格上昇もあり実際の取引重量では、半分程度の回復と考えられる。

買付品の構成では、鰯メ粕(以下、メ粕は鰯についてだけをいうことにする)が二六・八パーセント、鯧粕が二九・四パーセント、その他が三八・九パーセントとなっている。その他が高い比重を占めているのは、産地名だけでメ粕、鯧粕いずれもと判断が付かないものが多数入っているからである。タルマイ・厚田・マシケ・ラシヨロ・ネモロ・南部粕といったものである。蝦夷地では鯧粕だけでなく、鰯メ粕も生産されたので、地名だけでは判断ができない。この点を踏まえると、メ粕と鯧粕で大半を占めたとはできよう。ここには干鰯は現れないが、これも江戸問屋から相当量が買付けられたことは後に検討する。

買付先についてみると、大坂の干鰯屋からの買付銀高は三一・三パーセント、松前問屋からは五五パーセント、大坂周辺では兵庫から四・六パーセント、不明が九・一パーセントとなっている。不明には、大和屋仁三郎・鷺屋与兵衛・鮎屋徳兵衛・兵庫屋六左衛門・阿波屋金兵衛・油屋喜右衛門・佃利(佃屋利兵衛力)など干鰯屋仲間や松前問屋によく見られる屋号を持つものが多く、仲間帳などで確認できないものの、名義変更かその関係者であったと見られる。したがって例外的に兵庫から買付けけることはあったものの、ほとんど大坂の干鰯屋や松前問屋から仕入れていたことがわかる。<sup>15</sup>天保初年には、紀州などから積極的に仕入れることがあったが、中絶後はそうした広がりはもつことができてい



表2 江戸・浦賀問屋からの仕入れ

| 所属   | 屋号・名前   | 安政6年 |        | 万延元年 |        | 文久元年 |         |
|------|---------|------|--------|------|--------|------|---------|
|      |         | 俵数   | 代銀(匁)  | 俵数   | 代銀(匁)  | 俵数   | 代銀(匁)   |
| 銚子場組 | 和泉屋三郎兵衛 | 797  | 20,882 | 1074 | 20,632 | 741  | 15,225  |
|      | 十一屋藤蔵   | 529  | 15,153 | 360  | 8,074  |      |         |
| 元場組  | 喜多村富之助  | 630  | 18,488 | 636  | 13,094 | 3339 | 93,128  |
| 東浦賀  | 宮原屋治兵衛  | 143  | 3,829  |      |        |      |         |
|      | 宮原屋与右衛門 | 114  | 3,563  |      |        |      |         |
|      | 合計      | 2213 | 61,915 | 2070 | 41,800 | 4080 | 108,353 |

出典：東洋大学井上円了記念博物館所管・近江屋市兵衛家文書、安政6年正月「買付帳」(38番)。干鰯問屋の所属は江戸は、原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、1996年)表27。浦賀は横須賀市編『新横須賀市史』資料編近世1、(横須賀市、2007年)429～433頁。

注：代銀はその年の大坂相場で両建てから銀立てへ換算した。岩橋勝「近世米価・貨幣相場一覧」(『日本歴史大辞典』4、小学館、2001年)にしたがった。

ない。再興後日が浅いので、大坂干鰯屋仲間の与えられた枠組みのなかでの買い付けが中心にならざるを得なかったであろう。そのため大坂での買い付けの比重が天保二年(一八三一)より高くなっているが、なかでも松前問屋の比重が天保二年(一八三一)に二五・二パーセントだったのが、文久二年(一八六二)では五五パーセントと倍以上になっている。蝦夷地産品の流入が増加しているためであろう。いっぽうで大坂干鰯屋による靱市場での取引は天保二年(一八三一)が二一・一パーセントだったので、一〇パーセント程度しか伸びなかった。

内容を見ると、靱市場はメ粕が中心で、松前問屋からは鯨粕を中心に買い付けている。ただ干鰯屋仲間が靱市場で売買するメ粕も静内鰯粕など蝦夷地産のものが半数程度占めるようになっていいる。もっとも近江屋は江戸干鰯問屋からも干鰯・メ粕は買い入れていたので、関東産の干鰯・メ粕を靱市場から調達する必要はあまりなかったともいえる。ほかでは佐伯・宇和粕などがあった。

松前問屋からは、当然、蝦夷産品を買い付けることになるので鯨粕が中心である。メ粕もあるが、これは単位が蝦夷地産で見られる本であり、同地産であったと考えられる。近江屋惣七・同熊蔵・鮎屋惣七・布屋和助・昆布屋伊兵衛などから買い付けているが、近江屋惣七・同熊蔵からの買い付けが中

表3 江戸積みと大坂着の重量差

| 大坂着月日 | 銘柄    | 俵数  | a大坂<br>着重量<br>(貫) | b江戸<br>積重量<br>(貫) | a－b<br>(貫) | 1両<br>当たり<br>俵数 | 代銀<br>(匁) | 運搬船主   |
|-------|-------|-----|-------------------|-------------------|------------|-----------------|-----------|--------|
| 2月17日 | 本場前寒引 | 12  | 9.95              | 10.1              | -0.15      | 3.5             | 252       | 西田市蔵   |
|       | 本場前寒引 | 26  | 8.49              | 10.3              | -1.81      | 3.6             | 530       | 西田市蔵   |
|       | 本場前寒引 | 15  | 9.53              | 9.1               | 0.43       | 3.2             | 344       | 西田市蔵   |
|       | 本場前寒引 | 11  | 10.87             | 9.2               | 1.67       | 3.2             | 252       | 西田市蔵   |
|       | 本場前寒引 | 12  | 8.35              | 8.5               | -0.15      | 3.3             | 267       | 西田市蔵   |
|       | 本場前寒引 | 12  | 9.16              | 9.1               | 0.06       | 3.3             | 267       | 西田市蔵   |
| 小計    |       | 88  | 56.35             | 56.3              | 0.05       |                 | 1,911     |        |
| 3月3日  | 本場前寒引 | 12  | 9.71              | 9.9               | -0.19      | 3               | 293       | 大津屋源太郎 |
|       | 本場前寒引 | 7   | 8.88              | 8.8               | 0.08       | 3.1             | 166       | 大津屋源太郎 |
|       | 本場前寒引 | 40  | 10.44             | 10.6              | -0.16      | 3.1             | 947       | 大津屋源太郎 |
|       | 本場前寒引 | 25  | 10.02             | 9.6               | 0.42       | 3.1             | 592       | 大津屋源太郎 |
|       | 本場前寒引 | 15  | 8.18              | 8.3               | -0.12      | 3.7             | 297       | 大津屋源太郎 |
|       | 本場前寒引 | 19  | 9.43              | 8.9               | 0.53       | 3.6             | 387       | 大津屋源太郎 |
| 小計    |       | 118 | 56.66             | 56.1              | 0.56       |                 | 2,682     |        |

出典：東洋大学井上門了記念博物館所管・近江屋市兵衛家文書、安政6年正月「買付帳」(38番)。

注：代銀はその年の大坂相場で両建てから銀立てへ換算した。岩橋勝「近世米価・貨幣相場一覧」(『日本歴史大辞典』4、小学館、2001年)にしたがった。

心であった。

大坂周辺では、兵庫の魚屋惣左衛門から南部中羽粕が買  
い付けられた。同人は、嘉永三年(一八五〇)の兵庫津の  
粥施行記録である「補助簿」に宮前町居住で名前がある  
が、明治三年(一八七〇)の兵庫干鰯屋仲間の名簿「戎講  
印形帳」には見えない。正規の干鰯屋仲間ではなかったの  
かも知れない。大坂湾岸地域からの仕入れは、これ以外な  
かったので、この時期は例外的なものであったようである。

つぎに江戸・浦賀問屋からの干鰯の買い付けについて見  
てみよう。その状況を表2に示した。安政六年(一八五九)  
から文久元年(一八六一)まで連続する三年間のものであ  
る。万延元年(一八六〇)まで二年間は二〇〇〇俵台、文  
久元年(一八六一)は四〇〇〇俵台になった。内容はすべ  
て干鰯でメ粕はない。大坂で干鰯について根強い需要があっ  
たことを指摘したことがあるが、近江屋が江戸問屋に求め  
るものも、やはり干鰯であったといえる。江戸問屋は当然、  
メ粕も扱っており、伊勢などでは天保期にはメ粕が中心と  
なっていた<sup>18)</sup>。大坂でもメ粕へ移る傾向はあるものの、内容

は蝦夷地産メ粕で、干鰯については関東産の需要も強かったのである。

ところで韃の干鰯屋仲間が出した報告では、大坂への関東干鰯の移入は安政四年（一八五七）で四万七八九一俵、安政五年（一八五八）で一万二八八九俵であった。<sup>19</sup>したがって近江屋の仕入れ俵数は大坂に入荷する関東干鰯の相当数を占めたことになる。近江屋は安政六年から干鰯を買い付けたので、年が重ならず比較ができないが、安政四年（一八五七）程度の大坂入荷量があったとすると、その四・六パーセントの比重を占めたこととなるし、安政五年を基礎とすると実に一七・二パーセントにもなる。近江屋だけで一万俵を越えた天保期に比べることはできないが、それでも大坂入荷の相当数を占めたようである。

取引相手についてみると、銚子場の和泉屋三郎兵衛と元場の秋田屋・喜多村富之助とは天保期にも取引があった。和泉屋は泉州在住の江戸店持ち商人であった。<sup>20</sup>また秋田屋は関宿出身で江戸干鰯問屋株を持って進出してきた商人で、大坂にも北新堀に出店があり、近江屋長兵衛家などと取引があった。<sup>21</sup>十一屋は、喜多村家と同じく下総関宿の干鰯商で江戸に進出したものであった。<sup>22</sup>また宮原屋治兵衛・同与右衛門は東浦賀の干鰯屋で、嘉永四年（一八五一）の間屋再興の願いに名前が見える。<sup>23</sup>ことに治兵衛は仲間惣代などを勤めた有力者だった。かつて取引のあった和泉屋や喜多村を中心に関東産干鰯の仕入れが行われていたことがわかる。

関東干鰯の仕入れは正月から五月までが中心で、寒引き、余寒引き、冬引きといわれた冬の漁であがったものを干して出荷していた。産地は、本場が中心で、ほかに下総日在、下総・西方・東良見・常陸・常陸矢田部などの名前があがっている。

また安政六年（一八五九）の部分には、「手前」と近江屋市兵衛が買い付けた記載が見られる。その後、万延元年（一八六〇）・文久元年（一八六一）ともに記載が一切ない。すべて市兵衛が買い付けたので区別する必要もなかったの

であろう。天保期には、御手前ものや某分と手前ものとは区別された江戸問屋やその関連商人の送り荷があったが、再興期にはそれがなくなっていた。<sup>(24)</sup>取引が中絶したため、送り荷を受けるだけ関係の再構築ができていなかったと考えられる。

ところで万延元年（一八六〇）の買付帳では、十一屋藤蔵からの干鰯について、江戸積み時点での干鰯の一俵当たり平均重量と大坂着時点での重量が記載されている箇所がある。これを表3に示した。二月一七日着の西田市蔵船の場合と三月三日着の大津屋源太郎船の場合である。両者の重量差を $a - b$ と比較すると、多いもので一貫目前後の差が出ていることがわかる。マイナスは、江戸積み時点より大坂着時点で減量したことを示し、プラスは増量したことを示す。マイナスは乾燥や俵よりの目こぼれ、抜き取りなどが考えられる。乾燥でも自然ではなく、意図的に濡れさせて重量を増したものが、船で運んでいる内に乾燥して軽くなる場合もある。また増量した場合は、海水に触れたか、船底で湿気を含んだことが考えられよう。いずれにしても状況により、江戸から大坂へ運送過程で量目の変化があり、干鰯屋としては把握しておく必要があったであろう。<sup>(25)</sup>

### 三 安政・文久期の販売の動向

再興期の近江屋市兵衛で概要を把握することの可能な売日記は、開業後二年たった安政四年（一八五七）から万延元年（一八六〇）までである。買付帳より、開業に近い時期の実態がわかる。魚肥は、購入後、時を経ないで売ることが普通で、何年も蔵に入れておくことはないの、販売品から仕入れ事情をうかがうこともできる。表4に販売品目の動向

表4 近江屋市兵衛の肥料販売品目の推移（単位：匁）

| 分類   | 品目      | 安政4年    | 安政5年    | 安政6年    | 万延元年    |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 干鰯   | 干鰯      | 38      | 1,639   | 2,279   | 2,340   |
|      | 関東      | 3,237   | 7,297   | 58,241  | 78,651  |
|      | 蝦夷地・日本海 |         | 5,112   |         |         |
|      | 佐伯      | 329     |         | 162     |         |
|      | その他     | 3,444   | 577     |         | 1,225   |
|      | 小計      | 7,048   | 14,625  | 60,683  | 82,216  |
| メ粕   | 鰯粕      | 55,240  | 55,454  | 430     | 18,096  |
|      | 関東      | 2,635   | 1,128   | 2,969   | 1,739   |
|      | 蝦夷地・日本海 | 8,451   | 563     | 13,013  | 80,335  |
|      | 佐伯      | 2,618   | 1,313   |         | 817     |
|      | その他     | 2,172   | 4,040   | 3,985   | 4,688   |
|      | 小計      | 71,116  | 62,497  | 20,398  | 105,675 |
| 鯉粕等  | 鯉粕      | 144,062 | 126,233 | 68,520  | 182,238 |
|      | 羽鯉      | 20,993  | 25,714  | 2,510   | 1,184   |
|      | 数子      | 8,100   | 2,335   |         | 1,200   |
|      | 鯉粕      |         |         |         | 29,861  |
|      | その他     | 3,310   | 6,543   | 595     |         |
|      | 小計      | 176,465 | 160,825 | 71,625  | 214,483 |
| その他  | その他     | 98,166  | 36,666  | 60,323  | 101,875 |
|      | 合計      | 352,795 | 274,614 | 213,028 | 504,249 |
| 構成比率 | 干鰯      | 2.0     | 5.3     | 28.5    | 16.3    |
|      | メ粕      | 20.2    | 22.8    | 9.6     | 21.0    |
|      | 鯉・鯉     | 50.0    | 58.6    | 33.6    | 42.5    |
|      | その他     | 27.8    | 13.4    | 28.3    | 20.2    |
|      | 合計      | 100.0   | 100.0   | 100.0   | 100.0   |

出典：井上円了記念博物館所管・近江屋市兵衛家文書、33、37、39番。各年度の「干鰯売日記」。大阪大学経済史経営史資料室所管・田中市兵衛家文書、安政6年正月『干鰯売日記』。

注：代銀はその年の大坂相場で両建てから銀立てへ換算した。岩橋勝「近世米価・貨幣相場一覧」（『日本歴史大辞典』4、小学館、2001年）にしたがった。

を示した。

全体の動向では、安政四年（一八五七）には売り上げ総額が銀三五二貫匁余で、その後、安政五、六年と二〇〇貫匁台に低迷するが、万延元年（一八六〇）には五〇四貫匁余と回復した。買日記帳では文久二年（一八六二）には銀七十四貫匁余となっているので、万延元年頃から商売が軌道に乗り始めた様子がうかがえる。

売り上げ品目の構成では、安政四、五年までは干鰯の比重が低く、メ粕が高かった。また蝦夷地産の鯉粕・羽鯉などが中心となっていた。しかし安政六年（一八五九）、万延元年（一八六〇）

表5 近江屋市兵衛の取引先（単位：匁）

| 地域          | 区分     | 安政4年    | 安政5年    | 安政6年    | 万延元年    |
|-------------|--------|---------|---------|---------|---------|
| 大坂          | 干鰯屋    | 44,304  | 104,199 | 110,310 | 180,714 |
|             | 市中     |         |         | 361     | 626     |
|             | 東成・西成  | 14,101  | 37,529  | 30,908  | 36,159  |
|             | 小計     | 58,405  | 141,728 | 141,579 | 217,499 |
| 大坂周辺        | 摂津     | 15,782  | 2,036   | 14,364  | 6,958   |
|             | 河内     | 1,220   | 137     | 672     |         |
|             | 和泉     | 272,245 | 127,660 | 51,396  | 171,312 |
|             | 小計     | 289,247 | 129,833 | 66,432  | 178,271 |
| その他・不明      |        | 5,143   | 2,496   | 5,017   | 108,479 |
| 合計          |        | 352,795 | 274,614 | 213,028 | 504,249 |
| 構成比率<br>（%） | 大坂     | 16.6    | 51.6    | 66.5    | 43.1    |
|             | 大坂周辺   | 82      | 47.3    | 31.2    | 35.4    |
|             | その他・不明 | 1.5     | 0.9     | 2.4     | 21.5    |
|             | 合計     | 100.1   | 99.8    | 100.1   | 100     |

出典：表4に同じ。

には干鰯が回復して、メ粕・鯡系の比重が低下している。  
また全体にその他の比重が高いが、この中身は、蝦夷地産のタルマイ・茅部・マシケ・厚田など産地記載しかない粕類で、鰯メ粕か鯡粕か判別がつかないものである。これらを考慮すると蝦夷地産の比重がかなり高かったといえる。

安政四、五年は干鰯の比重が低く、ことに関東物は安政四年（一八五七）では二二〇俵、安政五年（一八五八）では二四五俵に過ぎなかった。俵数からいって、江戸問屋との取引引きはまだなく、靱市場に入ったものを買いつけて販売したと考えられる。おそらく江戸との取引引きを再開できる交流や信用がなく、靱市場や松前問屋からの仕入れに頼っていたのであろう。

安政六年（一八五九）<sup>26)</sup>、万延元年（一八六〇）の両年については、関東干鰯の江戸・浦賀問屋からの買い付けが本格化して、その比重が高くなっている。安政六年（一八五九）の買い付け干鰯は二二一三俵であったが（表2）、販売量は一八七三俵と三本であった。また翌万延元年（一八六〇）には、仕入れ二〇七〇俵にたいして、三三九一俵を販売した。万延元年（一八六〇）は江戸問屋からの仕入れにたいして、関東干鰯の販売量は一三二五俵も多くなっている。靱市場で買い付けたか、

買付帳に出てこない紀州などの商人が中継したものを買い付けたかしたのであろう。ただこの時期まだ紀州との取引は開けていないし、文久二年（一八六二）の干鰯買日記では、鞍の干鰯屋からは干鰯二八九俵の買い付けしかない（表1）。万延元年（一八六〇）の干鰯買日記が残っていないので、疑問の残るところである。

万延元年（一八六〇）は、安政六年（一八五九）に比べて倍以上の売り上げ高になっている。蝦夷地産の鯨粕について見ると、安政六年（一八五九）が一万三六五〇貫余にたいし、万延元年（一八六〇）には四万四八七八貫余となり実際の販売重量が三・二八倍の増加となっている。価格が上昇したのではなく、実態量が増加したと見てよいであろう。このなかでメ粕の増加と鯨系魚肥の増加が顕著に見られる。メ粕では蝦夷地・日本海産が中心で、関東産メ粕の比重はわずかしかないし、それも減少している。表2の買付帳では江戸問屋から仕入れるものには、すべて干鰯でメ粕は含まれなかった。関東物のメ粕は俵数が少ないこともあり、ほかの干鰯屋が仕入れたものを買い付けて販売したと考えられる。いっぽう鯨粕の増加が大きく全体に大きな役割を果たしていたことが明らかである。

販売先について表5に示した。安政四年（一八五七）では摂津・河内・和泉の大坂周辺地域が八二パーセントと他を圧倒する高い比重を占めた。とくに和泉がその中心で、全体の七七・二パーセントを占めていた。買い手は和泉大津の和泉屋久三郎、岸和田の鯉屋甚兵衛、又野平助、貝塚の布屋清兵衛、沼島屋助治郎、松屋平兵衛、湊屋武兵衛、布屋七郎右衛門、松屋嘉兵衛などである。その後、和泉の比重は低下するものの、当初は大坂湾岸の泉州の肥料商との強い結びつきがあったことがわかる。大津・岸和田・貝塚の肥料商との取り引きは天保期では目立つほどではなかった。再興期になぜこれほどまで買い付けがあったのかわからない。安政四年（一八五七）では、泉州以外は鞍の干鰯屋に販売することも余りなく、大坂地続きの東成・西成郡などの農民を中心に、摂河泉の在村に販売したようである。東成・西成郡では、鞍にも近い市岡新田の農民への販売が中心となっているが、肥料小売商と考えられるのは一名だけで、直接消



費者農民が多数買いにきている。在村肥料商は摂津池田と今津の肥料商が買い付けているのが目につく程度であった。なおその他に、阿波国板野郡佐藤塚村の農民への販売があったが、これが最後で天保期のような発展は見られなかった。また天保期に見られた尼崎とその周辺への販売がほとんどなくなっていた。<sup>(26)</sup>

安政五年（一八五八）になると、韃の干鰯屋への販売が倍増し、和泉の港町の肥料商との取り引きが減少した。和泉の肥料商の取り引きの減少はその後も続いていったと考えられる。安政六年（一八五九）は、江戸・浦賀問屋との取り引きは再開されたが、取引量全体は振るわなかった。関東干鰯の販売では確認できる一八七三俵の内、八六五俵が韃の干鰯屋に販売され、ほかはそれ以外に売られたが、主な販売先は尼崎油屋長兵衛（三四八俵）、岸和田の鰹屋甚兵衛、布屋清兵衛、薩摩屋伊兵衛（合計三三六俵）となっており、一一九一俵が大口の小売商との取り引きとなっていた。安政六年（一八五九）の鯨粕の減少は価格の高騰によったようで、前後の大坂市場の鯨粕の一〇貫目当たり平均価格と近江屋の販売平均価格を比較するとつぎのようである。

| 年代   | 大坂価格 <sup>(30)</sup> | 近江屋販売平均価格 |
|------|----------------------|-----------|
| 安政四年 | 三六・四二匁               | 三六・四二匁    |
| 安政五年 | 四三・二八匁               | 四三匁       |
| 安政六年 | 四七・一五匁               | 五〇・二匁     |
| 万延元年 | 四四・二五匁               | 四〇・六匁     |

安政五、六年に鯨粕価格は高騰し、万延元年（一八六〇）に少し収まったことがわかる。これを受けて鯨粕販売が低迷したようである。安政五年（一八五八）に幕府が箱館物産会所を設置して、松前物の一手取りさばきを行い始めたことも価格高騰の原因であろう。<sup>(31)</sup> 関東干鰯の仕入れもそのことと関係しているのかも知れない。また大坂価格と近江屋市兵



衛の価格差は余りなく、万延元年（一八六〇）では、大坂着価格の方が高いという逆転した現象も見られる。できるだけ安価な魚肥を仕入れたのであろうが、販売でも利益を余り見込まないで、販売量の拡大に努めたようである。

万延元年（一八六〇）になると販売額は増加する。関東産干鰯の増加もあったが、その中心は蝦夷地産のメ粕や鯡粕となっている。価格を抑えた販売が万延元年（一八六〇）の販売量の増加につながっているのであろう。万延元年（一八六〇）には、その他が増加しているが、これは所属の記載のない新しい購入者が増加したためである。和泉屋宇吉、万屋栄治郎、錫屋正太郎、伝法屋吉兵衛、木原屋安次郎、近（近江屋か）勘四郎、塩屋利八などである。出てくるのは、一般の項目で、大坂干鰯屋との取り引きを記録した「地方」の部分ではない。当然彼らの名前を干鰯屋のなかに確認できず、居所の記載もない。塩屋利八だけは紀州久保村の肥料商と確認できるがほかは不明である。<sup>(32)</sup> 大坂市中の商人ではないかと考えられるがはっきりしない。

## まとめ

近江屋市兵衛の再興期の経営について検討してきた。市兵衛家は天保末年に当主の死去により、残された姉弟が本家長兵衛家に引き取られ、商売は中絶したが、安政二年（一八五五）に市蔵が成長したことにより再興された。再興の当主市蔵が市兵衛を襲名したが、この三代目市兵衛が明治になって、第四十二銀行の経営に成功して、大阪商工会議所会頭になる田中市兵衛であった。したがって田中市兵衛の慶応元年家業継承説は誤っていることが明らかになった。市兵衛について、丁稚上がりの苦勞人と対比されて、大坂干鰯屋に生まれ、「先祖以来、数代をかさねた大阪はえぬきの豪商であつて」と恵まれた環境で成長した人物といった受け止め方をされている面がある。<sup>(33)</sup> これも中絶・再興の事情を考

えると、陰影があることが明らかとなるう。

近江屋は安政二年（一八五五）に再興されたが、その仕入れについては、文久二年（一八六二）しか干鰯買日記が残っていない。干鰯買日記は大坂での魚肥の購入記録であるが、これによれば、粕・鰯粕を中心に仕入れていたことがわかる。またその仕入れ先は松前問屋を中心に、靱の干鰯商であった。いっぽう安政六年（一八五九）からは江戸・浦賀問屋との取り引きも本格化し、次第に仕入れ範囲を拡大していることがわかる。江戸・浦賀問屋からの仕入れは、天保期に比べるごくわずかであるが、関東干鰯は大坂自体に入荷が減少しており、そのなかでは相当の比重を占めるものであった。文久二年（一八六二）には、総額では天保期にならぶ仕入れ銀高になったが、これはこの間の魚肥価格の高騰によるもので、重量ベースで比較すると鰯粕で半分程度の回復であった。

いっぽう販売については、安政四年（一八五七）より万延元年（一八六〇）までの売日記が残っており、再興直後の様子がわかる。販売先では、当初和泉・大津・岸和田・貝塚など和泉の諸港町の肥料商がほとんどを占め、その後、緩やかに比重は低下する。これ以外は、大坂の干鰯屋と西成・東成郡の大坂に隣接する地域の農民を中心にした販売であった。天保期には見られた摂津・尼崎周辺の肥料商への販売は回復していなかった。安政五、六年には鰯粕価格の高騰があり、販売量も減少する。このことが関東干鰯の仕入れに乗り出す契機になったと考えられる。また魚肥の重要部分を占めた鰯粕の大坂価格と近江屋の販売価格を比較すると、時には逆転する場合もあり、利幅を少なく売っていたことがある。再興期には、顧客の獲得のため、価格を抑えて販売していたのであろう。

注

（１）拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」（一）（『東洋大学文学部紀要』六七集史学科篇三九号、二〇一四年）五一～七六頁。

（２）以下、文書は基本的には東洋大学井上巳了記念博物館所管、近江屋市兵衛家文書による（以下、近江屋市兵衛家文書と略

称する)。なお一部、大阪大学経済学部経済史経営史資料室所管の近江屋市兵衛家文書を使用した。

- (3) 大阪市史編集所所管・近江屋田中家文書、九八一、九八〇番。以下、近江屋長兵衛家文書と略記する。

- (4) 近江屋長兵衛家文書、九七九番。

- (5) 拙稿「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一五号、二〇一三年) 図1近江屋長兵衛家略系図。

- (6) 近江屋長兵衛家文書九八四—二番。

- (7) 拙稿「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」(前掲) 図1。

- (8) 近江屋長兵衛家文書九八三—三番。

- (9) 例えば、高村直助「田中市兵衛」(『国史大辞典』九卷、吉川弘文館、一九八八年) は田中市兵衛の生年を天保九年九月六日とする。天保九年生まれは、諸書にほぼ共通している。典拠が明らかではないが、おそらく著名になってから市兵衛の残した記録によると考えられる。

- (10) 近江屋長兵衛家文書九八二—一番。

- (11) 例えば、宮本又次編『上方の研究』四卷(清文堂出版、一九七六年)六一—五〇六三頁、「田中市兵衛」の項に、田中市兵衛を「天保九年九月、田中八郎の子として歿にうまれ、明治元年に父祖の業をついで商売をはじめたが、生来の誠実さと勤勉さをもって、年とともに問屋間の信頼を得、やがて大坂だけではなく、近畿一円にわたる広汎なる地域まで肥

料を販売するようになり」と紹介している。

- (12) 国文学研究資料館、祭魚洞文庫、大坂干鰯商仲間記録、文久元年「記録名前帳」(六三番)。以下、大坂干鰯商仲間記録と略称する。

- (13) 近江屋市兵衛家文書、文久二年「干鰯買日記」(四一番)、安政六年「買付帳」(三八番)。

- (14) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」(一)(前掲) 表1。

- (15) 松前問屋については、原直史「松前問屋」吉田伸之編「商いの場と社会」シリーズ近世の身分的周縁四、吉川弘文館、二〇〇〇年)、大坂干鰯屋については、大坂干鰯商仲間記録、文久元年「記録名前帳」(六三番)。

- (16) 神戸市教育委員会編「兵庫岡方文書」二輯一卷、二三〇—二三九頁。

- (17) 神戸市立博物館所管、干鰯屋仲間印形帳の明治三年「戎講印形帳」。

- (18) 拙稿「近世後期伊勢の肥料と農業経営」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一七号、二〇一五年)。

- (19) 拙稿「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』一五号、二〇一三年)、表2。

- (20) 原直史「日本近世の地域と流通」(山川出版社、一九九六年) 表27、表36。

- (21) 原直史「日本近世の地域と流通」(前掲) 表27、表36。大坂の出店については拙稿「大坂干鰯屋近江屋長兵衛と地域市場」

〔『東洋大学文学部紀要』六六集三八号、二〇一三〕。なお拙稿で、「秋田富之丞」印文「北新場」とあるのは誤読で、「富之助」「北新堀」が正しいので訂正しておく。

- (22) 原直史『日本近世の地域と流通』（前掲）表27。

- (23) 横須賀市編『新横須賀市史』資料編、近世（一）（横須賀市、二〇〇七年）四二九～四三三頁。

- (24) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」（一）（前掲）。

- (25) 国文学研究資料館、祭魚洞文庫、大坂干鰯商仲間記録、文久元年「記録名前帳」（六三番）では、関東以下の干鰯について、「尅貫目違」は「軽俵戻り」となっていて、返却することになっている。ただ肥料商の帳面では区分けされて安値が付けられているものもあり、事故俵を安値で引き取った場合もあった。

- (26) 安政六年の売日記は、大阪大学経済学部経済史経営史資料室所管の田中家文書で、これについては中西聡『近世・近代日本の市場構造』（東京大学出版会、一九九八年）一四四頁、表4-16に分析がある。ただ中西の分析では東洋大学井上円了博物館所管近江屋市兵衛家文書は利用されていないし、市兵衛家の再興も把握していないので十分ではない。

- (27) 岡田光代「幕末維新时期泉南地域の肥料流通」付表（石井寛治・中西聡編『産業化と商家経営』名古屋大学出版会、二〇〇六年）。

- (28) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」（一）（前掲）。

- (29) 拙稿「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営」（一）（前掲）。

大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営（二）

- (30) 大阪水産物流通史研究会編『資料 大阪水産物流通史』（三一書房、一九七一年）（7）肥料価格表による。鰯の干鰯屋仲間は毎月上中下に分けた魚肥の価格を大坂町奉行所に報告していた。鰯粕を扱う松前問屋もこうしたことはしていたであろう。この資料が基になって本資料が作られたと考えられる。したがって大坂価格が鰯市場や松前問屋の卸価格といえる。近江屋は主としてここから買い付けて、小売りや直接消費者農民に販売したのであるから、鰯の市場価格に利益分を上乗せして販売しなければならない。それが価格差が余りなかったり、逆転すれば、利益はなくなってしまうことになる。

- (31) 宮本又次編『上方の研究』四卷（前掲）六一七頁。

- (32) 岡田光代「幕末維新时期泉南地域の肥料流通」付表（前掲）。

- (33) 田中市兵衛については、宮本又次編『上方の研究』四卷（前掲）六一六頁。

#### 付記

本研究は二〇一四～二〇一六年文部科学省研究費補助「近世の肥料商と農業経営」の研究成果の一部である。調査にあたって協力いただいた東洋大学井上円了記念博物館、大阪大学経済経営史研究所、大坂市史編集所以下の方々 に記して感謝の意を表す次第です。